



## 精神科卒後教育を考える ——新旧臨床研修制度を経験した若手精神科医の立場から——

コーディネーター 田中 徹平, 中野 和歌子, 野村 総一郎

平成16年度よりプライマリーケアを重視した新臨床研修制度が開始され、大学医学部卒業直後に専門分野の研修をしていた、いわゆる従来のストレート研修から内科、外科などの所定の初期臨床研修を終了した後に、後期臨床研修で各々の専門分野をさらに研修するという現行の研修体制へと移行した。精神科専門研修に関しては、平成18年度以降、初期臨床研修を終了した医師が、専門医制度に則った3年間の後期臨床研修を行っている。新臨床研修制度が開始してから、出身大学で研修を行わない医師も増えており、精神科後期研修のあり方は多様化していると考えられる。平成21年は、平成16年に大学を卒業した医師が、新臨床研修を経て3年間の精神科後期研修を終えた初めての年であり、精神科後期研修について、教育の受け手である若手医師と指導する立場の医師の立場を交え、その現状と課題について議論することは大きな意義があると考え、日本若手精神科医の会(NPO JYPO)の会員が中心となり本シンポジウムを企画した。

本シンポジウムでは、平成18年度以降に始まった精神科専門医制度に則った後期研修を大学で

行った立場から中野和歌子(産業医科大学)が発表し、大学に所属せずに研修を行っている立場から猪狩圭介(肥前精神医療センター)が発表し、また、ストレート研修を行った最後の世代という立場から中前貴(京都府立医科大学)が発表した。さらに、NPO JYPOに所属し、教育に関する国際シンポジウムなどで発表を行っている加藤隆弘(九州大学)が、世界の精神科教育の事情や精神科医の意識について発表した。

中野は、全国の大学病院と国立病院機構の後期研修医(卒後3~5年の精神科医師)および従来のストレート研修で研修を行った医師(卒後6~8年の精神科医師)を対象に行ったアンケート調査の結果を発表した。この調査では、精神科専門医制度研修手帳(以下、研修手帳)の購入率および利用率がともに低く、また、各施設間で症例の偏りが認められた。こうした結果から、研修手帳の普及が必要であること、また、研修の偏りの是正の一案として部外研修が有用であることなどを指摘した。

猪狩は、大学医局に所属しない研修のあり方の1例として肥前精神医療センターでの研修の様子

---

第105回日本精神神経学会総会=会期:2009年8月21~23日,会場:神戸国際会議場・神戸商工会議所・クオリティ  
ーホテル神戸・ポートピアホテル

総会基本テーマ:わが国精神医学のめざす地平,坂の上の雲

シンポジウム 精神科卒後教育を考える——新旧臨床研修制度を経験した若手精神科医の立場から—— 座長:田中  
徹平〔防衛医科大学校精神科学講座, NPO法人日本若手精神科医の会(NPO JYPO)], 中野 和歌子  
〔産業医科大学精神医学講座, NPO法人日本若手精神科医の会(NPO JYPO)], 野村 総一郎(防衛医  
科大学校精神科学講座)

と、国立病院機構間の連携による精神科後期研修について述べ、後期研修において各研修施設間の連携が有用であると発表した。

中前は、従来のストレート研修最後の世代という立場から現在の研修を考えると、外来教育にその違いが現れるのではないかと考え、アンケート調査を実施し、その結果、外来陪席期間が現在の後期研修では短くなっていること、さらに、予診のみ取るだけで本診、再診に陪席しない医師が増えているということが明らかになったことなどから、精神科の外来教育としては1年以上、予診、本診、再診の陪席を通して学ぶことが望ましいと発表した。

加藤は、心の医者、脳の医者の狭間で揺れ動いている自らの経験から、他の精神科医師のアイデンティティーに興味をもち、主として日本、米国、インドの卒後10年目までの若手精神科医を対象に、アンケート調査を実施し報告した。その結果から、日本では脳-心-社会のバランスの良い精神科医の育成という点で、偏りが大きいのではないかと指摘し、精神科後期研修における必修課題の

再検討が必要であると発表した。

いずれの発表も、若手の視点から日本の精神科後期研修教育の現状とその問題点を鋭く指摘したものであり、これらの発表を踏まえた総合討論では、研修手帳の普及、精神科医のメンタリティー、精神科医のアイデンティティーなどについて、シンポジスト間のみならず、会場の先生方を含め率直な議論が交わされた。最後に共同座長の野村総一郎（防衛医科大学校）が、総合討論の内容を踏まえ日本の卒後教育について、さらに、1) 精神科医の質を担保する教育、2) 精神科医の全体の水準を引き上げる教育、3) 日本のみならず世界の精神医学を牽引する指導者の教育という3つの水準での教育を考えていく必要があるとの意見を述べた。

今回のシンポジウムは、若手の視点だけでなく、教育者の視点からも日本の精神科卒後教育について考察するよい契機となったと考える。今後とも、双方の視点から精神科卒後教育の問題点について議論し、質の高い精神科後期研修のあり方を模索していくことは重要であると考えます。